

[報告] 第 26 回歴史地震研究会参加記

佛教大学大学院文学研究科日本史学専攻* 大邑潤三

Impression Report of 26th General Meeting

Junzo OHMURA

Bukkyo University,96,Kitahananobo-cho,Murasakino,Kita-ku,Kyoto,603-8301,Japan

§ 1. はじめに

平成 21 年 9 月 12 日(土)~14 日(月)にかけて、第 26 回歴史地震研究会が滋賀県大津市において開催された。12 日に研究発表会、13 日に研究発表会と公開フォーラムと総会、14 日には「湖西の地震遺跡をたずねて」と題した野外見学会が行われた。

今回は私が拠点とする近畿での開催ということで運営の補助も任され、会場や野外見学会の下見にも参加した。

一昨年から参加させて頂いているが、今回も分野を越えた活発な研究発表が行われ、私にとってまたいへん興味深い貴重な研究発表ばかりであった。そこでここでは、研究発表会での模様を簡単に報告したい。

§ 2. 研究発表(12 日)

大会初日の 12 日には、防災教訓、活断層、地震の物理、近代の地震、近世の地震などの内容で口頭発表が行われた。またそれに挟まれる形でポスター発表も行われ、20 名以上がそれぞれの研究内容を発表した。

今回も学際的なこの研究会らしく、様々な分野の研究発表が行われた。質疑応答も白熱し、異なった分野からの鋭い質問が飛び交っていた。私は文系の立場だが、地震研究を学際的に行う必要性を改めて感じる事ができた。

また今回の開催地が滋賀県ということで、開催地に因んだ研究発表も行われた。滋賀県湖北地域で 1909 年に発生した姉川地震に関するもので、震災写真を使った防災アピールの方法についてであった。こういった発表は是非地元の方に聞いて頂きたいものである。毎回開催地と関係の深い研究がいくつか発表されるが、研究成果を地域に還元するという意味で大変意義のあるものであると今回も感じた。

歴史地震研究会の特徴の 1 つとして、その学際的な性格が挙げられる。しかしそれだけでなく、大会で行われる公開フォーラムなどで研究成果を一般社会

へ発信するという、重要な役割も担っているという事を実感することができた。こういった交流は、地域の情報に接する事ができる良い機会でもある。今後も日本各地で研究大会が開催されるだろうが、その度に開催地との間で交流が生まれ、情報交換が成されると思うと、次回大会への参加がより楽しみになる。

§ 3. 研究発表と公開フォーラム(13 日)

2 日目の 13 日には、近世の地震と火山噴火、古代・中世の火山噴火と地震、間にポスター発表を挟んだ後、北近畿地方の地震と津波、と題し約 10 名の発表が行われた。

それぞれ貴重な話であったが、『町居崩れ』と『近江盆地の地震環境』に関する発表は、翌日の野外見学会の見学場所と関係することもあり、特に興味深く聞かせて頂いた。

午後には公開フォーラムが行われた。宇佐美龍夫先生をはじめとして、滋賀県立守山高校の中島健氏、滋賀県防災危機管理局長の小椋正清氏の 3 名による講演が行われた。それぞれ滋賀県に関係の深い内容であり、熱心に耳を傾ける参加者が多かった。地元に関する話題を、住民を交えた場で話をする事に大きな意義があると感じた。

§ 4. おわりに

今回の大津大会では、微力ながら運営の補助をさせて頂いた。補助という割には力不足で、逆に足手まといだったのではないかと今になって案じている。

今回は開催地が近畿ということで、大会の開催にあたっては東京との距離的な問題が少なからずあったようだ。それにもかかわらず大会が無事に開催できたのは、ひとえに運営事務の皆様のおかげであると感じる。しかしながらこの大会の魅力は、毎回違う土地で開催され、その場所に因んだ研究発表が行われ、地域との交流が行われる所にあると勝手ながら思っている。自分勝手な願いだが、今後是非この研究大会を日本各地で行い続けてほしい。

* 〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町 96